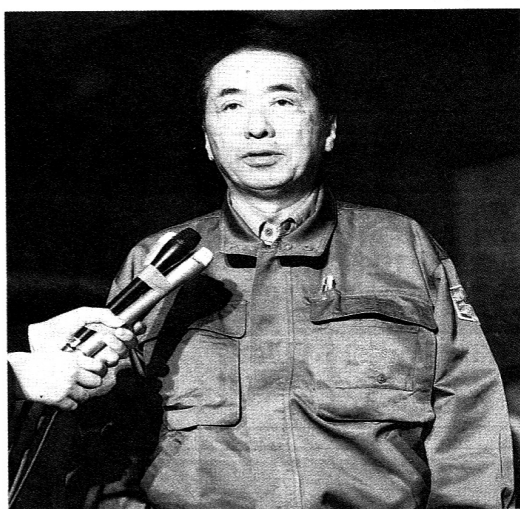


検証
吉田調書
②

福島第1原発の事故調査で大きな論点の一つになったのが、2号機が危機的状況に陥った2011年3月15日朝、東京電力が第1原発から全面撤退しようとしたのかどうか、だった。政府の事故調査・検証委員会の聴取結果書で吉田昌郎元所長は「逃げていない」と強い口調で否定している。

前日の14日夜から2号機原子炉への注水ができない状態が続いていた。
「あの時は1秒1秒胸が締め付けられるような感じで、本当に水が入るのかなと、ずっと私は考えていました。入らなかつたら大変なことになる。このままマルチ(ダウン)する、ものすごく線量が上がってくる。ただ最後、注水(担当者)と

全面撤退 強く否定



福島第1原発事故で政府と東京電力の統合対策本部設置を発表する菅首相＝2011年3月15日早朝、首相官邸

「現場 逃げてない」

吉田氏は退避を決める。格納容器が破壊された可能性があること判断したからだ。誰が残るかは各班長に決めさせ、最終的に約70人が残った。

を強めた菅直人首相は15日午前5時35分ごろ、東電と政府の統合対策本部を立ち上げようと東電本店に乗り込んだ。
対策本部内で菅氏は勝俣恒久会長ら経営陣らを前にまくしたてた。「撤退などあり得ない、命懸けでやれ」「撤退したら東電は100パーセントつぶれる」。その様子はテレビ会議を通じて第1原発の免震重要棟にも伝えられた。

「何をばかなことを騒いでいるんだと私は言いたい。本店とか官邸でくだらない議論をしているか知らないですけども、現場は逃げたのか。逃げていないだろう。これははっきり言いたいんです」

当時免震棟内にいた復旧班長の男性社員(51)は共同通信の取材に「こっちは闘っているのに、それを粉砕するような、後ろから機関銃で撃たれたようなスピイチでした」と振り返る。
菅氏の演説が終わった直後の午前6時14分ごろ、衝撃音とともに2号機圧力抑制室の圧力がゼロになったとの連絡を受け、

「使わないです。菅(氏)が言ったのか、誰が言ったのか知りませんが、使わなくてもいい。テレビで撤退だとか言っていて、ばか、誰が撤退なんていう話をしているんだと、逆にこちらが言いたいです」

「細野さん(細野豪志・首相補佐官)にも電話して『プラントはものすごい危ない状態です。水が入るか入らないか、賭けるしかないですけども、やります。ただ、関係ない人は退避させる必要があると考えています』という話をしました」
本店では清水正孝社長が官邸側に「退避」という言葉を使って意向を伝えたが、官邸側は「全面撤退」と受け止めた。不信感

(肩書は当時)